

アズレン料理部・餌付けの裏技

知多

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

指揮官が皆を餌付けするだけ

目次

アズレン料理部・餌付けの裏技	1
アズレン料理部 第二章・猛暑に反撃！茹でられるそうめん	7
アズレン料理部 第三章 ボンゴレ・砂抜き <small>の裏技</small>	14
アズレン料理部 第四章・空腹レ○プ！お手軽軽食と化したお握り	19

アズレン料理部・餌付けの裏技

アズールレーン。

それはこの海に突如現れ猛威を振るう未知の生命体・セイレーンに對抗すべく結成された、女性の形をした古の軍艦をその主戦力とする軍事同盟である。

その前線に位置するとある鎮守府は、謎の掟が存在することで知られていた。

「美味しいもの食べて楽しく生きよう」

これは、日々海を戦場として命懸けでセイレーンに立ち向かう彼女らと、それを支えたいとある指揮官の、平凡な記録である

指揮官（以下、指）「こんな前置き書いてもなあ、どーせ日記とか続かねえし」

プリンス・オブ・ウェールズ（以下POW）「そうね、貴方の場合レシピ帳になるのがオチじゃない？」

指「見てんじやねえよ恥ずかしいだろ」

POW「いいじゃない、減るものではないわ」

指「そうだけどよ…んで何の用だ？」

POW「あら、用事がなければ貴方の側にはいけないの？」

指「そんなこたあねえ、むしろずっと居てくれよ」

POW「ええ当然よ、貴方の秘書だもの」

指「(流すかよお…)しかし用事はあるんだろ?そんな顔してる」

POW「流石ね、その通りよ。シグニットが少し…ね」

指「シグニットがどうしたって？」

POW「ホームシックみたいなの、それで四六時中半泣きよ…私達のケアは貴方の仕事でしょ？」

指「あっちゃあ…ここんとこ新人にかかりつきりだったしなあ…マジでごめん」

POW「それはあの子に言っておいてあげてね？お得意のお料理もセットなら許してくれるわ」

指「こんな素人のでいいならな」

POW「美味しいもの食べて楽しく生きよう、って貴方が言ってくれたんじゃない。今のところそれも貴方が叶えてくれてる。シグニットも貴方のフィッシュ&チップスが楽しみで毎日頑張ってるのよ？」

指「うっわあ、嬉しいやら申し訳ないやら…よっしや、一丁やるかあ！」

ー厨房ー

指「さて所変わって厨房、早速フィッシュ&チップスの準備やんぞー」

POW（割烹着）「なんで私まで…」

指「食わせてやっから我慢しな、ジャガイモ剥くの結構大変だから手伝ってくれ」

POW「いいわね、それなら手伝ってあげるわ」

指「ありがとう、んじやまずジャガイモの芽を丁寧に取り除くぞー」

POW「しっかりやらないとお腹を壊してしまうのよね」

指「それどころじゃねえ、摂取し過ぎると死んじまう。ソラニンとチヤコニンって毒素なんだがな、加熱しても残るんでこの段階で切り落とすしか無えんだ」

POW「あら、それは怖いわね…私達に効くのかは分からないけれど」

指「可能性があるなら処理しとくさ、他ならぬお前らに食わせるんだから」

POW「貴方本当に私達には甘いわよね、そこが皆に好かれるんでしょうけれど」

指「いつもお前らばかり訓練とか戦場に出してるのに甘いなんてのもおかしいけどな」

POW「それは私達の使命、ひいては存在理由だもの。確かに辛いと感じる子もいるでしょうけれど、それでも前向きに進めるのは貴方

のおかげよ」

指「：あんまり誉めんじゃねえ、手元が狂う。」

P O W 「変なところに耐性が無いのね：あら、このジャガイモ緑色ね」

指「そいつは緑のとこ全部切り落とせ、駄目なら捨てろ」

P O W 「ここも毒なのね：うん、大丈夫みたい」

指「おっし一通り終わり、ありがとな。そしたら次はジャガイモを細く切る、シグニットは細いのが好みらしい」

P O W 「シユーストリングね：でも少し大きめに切るのよね」

指「そう、よく知ってるな。出来たら、次は魚だ。今日はパンガシウス使うぞ」

P O W 「パンガシウス？」

指「うん、かなり安い魚だが、脂の乗ったふわふわの白身。値段に反してかなり贅沢な美味しさだ。こいつをつまめるサイズに切る」

P O W 「何事も値段じゃないのね」

指「実際エリザベスも安い魚って気づいてないしな」

P O W 「陛下は：意外と庶民派でいらっしやるから：ね？」

指「あいつ単純で可愛いよな。：よし、それでジャガイモは水に一時間さらすぞ」

P O W 「結構かかるのね」

指「だな、ちよつと休憩」

――一時間後――

指「ほい、それでジャガイモを引き上げて水気拭き取るぞ」

P O W 「これをしないと衣が付きすぎるし揚げてて跳ねるのよね」

指「正解。流石だな」

P O W 「ありがとう。：ねえ指揮官、魚とジャガイモにまぶす粉は違うの？」

指「大体一緒。薄力粉と片栗粉を大体同じか片栗粉ちよい多めって感じ。魚の方にだけハーブとガーリックパウダー、それにパプリカ粉混ぜてある」

P O W 「少し違うのね。魚はパンチが効いててさぞシンプルなポテ

トに合いそうじゃないの」

指「だろ？んでジャガイモには薄く、魚にはちとしつかり衣をつけ
て…油に優しく入れる」

P O W 「どのぐらい揚げてればいいの？」

指「まずジャガイモを低温3分、それから魚と一緒に高温5分がい
い感じ」

P O W 「二度揚げ…たまらないわね」

指「だろ？…おっし、揚がったな」

P O W 「クッキングシートで余分な油を落として…何かけるの？」

指「シグニットはクレイジーソルト、それにケチャップとマスター
ドも別皿だな」

P O W 「私はクレイジーソルトだけでいいわ」

指「あいよ。おっし、熱いうちに持ってってやらんとな」

P O W 「ほふ、ほふ」

指「早えよ」

—シグニット・クレセントの部屋—

指「シグニット〜？今いいか？」

シグニット(以下シグ)「指揮官…：何しに来たの？忙しいんじゃないの？」

指「そう言うな、たまにはお前とのんびりしてえんだ」

シグ「ほんと？やったあ！上がって上がって」

指「ほいよく…ほれ、ちつといいもんこさえて来たぞ〜」

シグ「わあっ！フィッシュ&チップス！これもしかして作ってくれ
たの!?!」

指「勿論！お前の喜ぶ顔好きだし」

シグ「うう〜…嬉しいよお…！食べていい？」

指「おう、どうぞ召し上がってな」

シグ「はふっ…お芋サクサクでも中はホクホク…美味しい…」

シグ「お魚…あふっ、ほふ…美味しい…！ちよっとパンチの効いた、
シンプルなお芋とは違う味！身もふかふかでうち幸せだよお…！」

指「そこまで喜んでもらえるとはな、指揮官冥利ってもんだ」

シグ「…あのね、指揮官」

指「どした？」

シグ「うちね、最初は田舎から出て来て寂しかったけど…指揮官のお陰で今は毎日幸せ」

シグ「もちろん艦隊のみんなも優しくしてくれるから、お陰で寂しくなかったの」

シグ「でもね、やっぱり最初にうちの寂しさをやつつけてくれたのは指揮官なの。こうして大好きなフィッシュ&チップスまで作って、うちを幸せにしてくれた」

シグ「なのね、美味しいもの毎日お腹一杯食べて幸せなのにね…指揮官と最近あまり会えなくてね…寂しいって思っちゃったんだ」

シグ「ごめんなさい指揮官…うち贅沢な子になっちゃった…」

指「…そっか、こっちこそごめんなあ。寂しい思いさせちゃった。でもなシグニット、その寂しさは贅沢なんかじゃねえ。お前がこの艦隊に馴染んでくれた証拠だ。だから俺は嬉しくもあるんだ」

シグ「指揮官は悪くないよお…。そっか、贅沢じゃないんだ。じゃあこれからも…たまにでいいの、うちとお話して、一緒にフィッシュ&チップス食べてくれる？」

指「ああ、こっちこそそうさせてくれ」

シグ「やったあ！これで明日からも頑張れる！」

指「(P.O.Wの言う通りだったなあ…俺割と愛されてんな)」

指「俺も頑張るよ、シグニット。お前も、他の皆も、寂しくないように、楽しく過ごせるように」

—とある日、戦闘海域—

指『スカベンジャー型…やれるか？』

シグ「うう…怖いよお…」

指『大丈夫かよお…』

シグ「でも…帰ったらフィッシュ&チップス食べれる…！」

指『ああ、沢山作ってやるからな』

シグ「…！頑張る!!」

「P o W 「私にも頂戴ね？」
シグ 「うん！それじゃあ待っててね指揮官…！うち、頑張れる！！」

アズレン料理部 第二章・猛暑に反撃！茹でられるそ
うめん

ラファイー「」

綾波「」

ロングアイランド（以下、ロング）「」

指揮官（以下、指）「…何やってんだ干物共」

ロング「見てわかるでしょ…」

綾波「執務室の床が冷たくて気持ちいいのです…」

ラファイー「ぐでー…」

指「日当たり悪いからなあ、ここ。暑いのは暑いが」

ロング「でしょー…？だからここでお昼寝させて…」

指「いいけどそこドア当たるぞ？そそつかしい奴でも来たらー」

レパルス「指揮官ー！暑いー！！」バアン

ロング「グエツ…」

指「遅かったか」

レパルス「わあ！ごめんね〜！…とところで何でこんなところで伸びて
んのこの子ら」

指「暑いからだだよ」

レパルス「そうだよ暑すぎるんだよ！！仕事になんないってホント」

指「確かに今年おつかしいよなあ…」

レパルス「ねえ今日は休みにしない？もう真面目な面子からバテて
来てるよ」

指「マジ？そんじゃレナウンあたりやべえんじゃねえの？」

レパルス「とうにひっくり返ったよ…あと三笠は軍服脱ごうとしな
いで見事玉砕したよ」

指「うつそやん…アホやん…」

レパルス「ね？もう休みでよくない？これ仕事無理だよ」

指「だな…これ以上は洒落にならん。熱中症つてのは本来出しちや
いけない重大な傷病だ、すまん」

レパルス「しよーがないよ、世界を守る仕事だもん、少しは頑張らなきや。でも今日は流石にね…」

指「わかった。『本基地所属の全員に連絡。本日異常な猛暑により臨時休暇とする、各自熱中症にくれぐれも留意して静養に努めよ』」

レパルス「さつすがあ！話分かるう」

指「いや俺も休みてえもん…飯も食いてえし…」

レパルス「よく食欲あるよね…」

指「あんだよ皆夏バテか？…そんならとっておきがあるが…」

レパルス「食べるう！」

ロング「食わせろく…」

ラファイー「ろく…」

綾波「のです…」

指「いつまで伸びてんだオラ準備すつぞ！」

指「さてやつとこ本題だけど今日は流しそうめんやんぞお」

レパルス「流し…ソーメン？」

指「おう、確か重桜の食べ物だな、冷たくて食べやすいぞ」

レパルス「あれ、指揮官重桜出身じゃないの？」

指「血はそうだが生まれは違うんだよ。まあその辺はいいとして、まずは竹を組んでスロープみたいにするぞ」

レパルス「なんで？」

指「ここを冷水で川みたいにしてそこに麺を流すのさ、そいつを掬って食べる」

レパルス「面白そう…見た目も涼しくなりそうだね」

指「こんだけ大所帯だとかなりでかくなるな…」

ラファイー「じゃラファイーはここでお口開けて待ってる…」

綾波「鬼神の力…味わうがいい…」

指「スタンバイ早過ぎるわ」

指「さて、そうめんそのものは茹で上がるの早いで食べながら茹でて即氷水でシメる感じで」

ロング「サラマンドーよりはやーい？」

指「どこで覚えたんだよ…」

レパルス「ねえ指揮官、ソーメンってどうやって食べるの?」

指「ああ、タレに浸けて食べるんだ。そいつを今からこさえるのさ」
レパルス「どんな?」

指「ここも色んな国の面子揃ってきたからな、数種類作つとくさ」

指「まずはベーシック、めんつゆ。」

市販のがありやそいつでいいが、作るのも楽でな。醤油、砂糖、出汁…こいつは好きな使えばいい、あと酒。これらを好きな分量入れて一煮立ちさせれば完成だ。分量がアバウトなのはまあ好みがあるからだな。味見しつつやるがいいさ」

綾波「鰹と昆布の合わせ出汁を要求するのです」

指「昆布割とめんどくせえから顆粒でいい?」

綾波「美味しければなんでもいいです」

指「アツハイ。ほんで次はちよい東煌風を作る。」

ニンニクとショウガすりおろして、鶏ガラスープの元と塩、砂糖、酒、醤油、ちよつと豆板醤…これは好みで入れなくてもいい。これらをまた一煮立ちさせて完成だな。ちなみに鶏ガラスープと貝出汁の合わせでも旨いぜ。んで仕上げに各々お好みでラー油とか山椒だな」
寧海「ちなみにこの組み合わせは中華の基本よ!色々作れるから覚えておくことね!」グウウ

指「唐突な説明ありがとう、後で呼ぶから腹鳴らしながらよだれ垂らすな」

ラフィー「ユニオン風はないのー…?」

指「今から作るぜ、待つてな。」

んじゃユニオン…てか正直洋風はそんなにレパートリー無えんでユニオンロイヤルヴィシアと分けられねえからな、洋風って枠で一つだが許してくれや。」

まずオリーブオイル、トマト缶、塩コショウ、砂糖、水を入れて煮込む。んで、ここにチキンコンソメ入れて、お好みでバジルだな。今回そうめんつとことちよい水っぽく緩めに作るぜ」

ラフィー「おお…出来たら起こして…」

指「薬味と具材はもうござえてあるからな。お馴染みの薬味各種に茹でた魚介も具として置いてある。後は茹でて流しそうめんやるだけだから起きてろ、レパルスは皆を呼んできな」

レパルス「はいはい」

指「オラア干物共オ！食べたきや配膳をするんだよオ！」

ロング「横暴だー！」

寧海「仕方ないわねえ！」 シュバババ

指「うるせえ！後寧海食べ物かかると速いな、いつも足遅えのに」
トノサマーオナカスイター

オウケニコノヨウナタベモノハナイデスネ：

シツキカーンマダー？

指「おー皆来やがったな？よっしゃ、第一陣、流すぞお！！」

「「「おおおおお！！」」」

霧島「…そこッ！！」

サウスダコタ「ううん…僕はやはり…お箸だと厳しいな…」

山城「フオークありますよお」

サウス「ありがとう、よし…これなら負けない！」

霧島・サウス「「おおッ！！」」 ガガガッ

指「バトってんじゃねえ他がありつけねえだろうが！！」

三笠「あの二人は見ていて楽しいな、後腐れを残していない良い好敵手だ」

指「おう三笠、もう大丈夫か？」

三笠「ああ、ありがとう。しかし流しそうめんとは粋な計らいだな、のど越しと冷たさ、そしてつゆの香りが染み渡るようだ」

指「旨いか、そいつは何よりだ。バテても食べるのがそうめんの良いとこだな」

三笠「ロイヤルのメニューではこうは行くまいな、油っこいし」
レナウン「ロイヤル料理は洗練された王家の食卓にふさわしいものです、例え重桜の料理相手でも劣りはしません。あ、

指揮官このトマトソースおいしいです、具のエビとホタテがよく合います」

指「おーレナウンも元気か、気に入ってもらえたならなによりだ」
レナウン「レパルスは口の回りを真っ赤にしながら食べていました
…明日にもマナーを叩き直しておかねば…」

指「せっかちなのは筋金入りだよなあ…」

三笠「おお、ロイヤル風もまた酸味と甘味、そして旨味のバランス
がよい…少し重いが」

指「…おばあ ch」

三笠「断じて違う」

指「アツハイ」

ラフィー「指揮官…ソーマン…とれない…」

指「よしよし、これでよけりや食ってる。…あー成程、ありや取れ
ねえわ」

綾波「鬼神の力…味わうがいい…」バババツ

ジャベ「全力で行きまくす、ですっ」バババツ

ル・トリオンファン「ついてくるのは簡単じゃなくてよ？」モチモ
チ

指「こらー！他の奴らもいるんだから欲張るんじゃねえ！まだある
から！」

ル・トリオ「あら、私としたことがはしたない…申し訳ありません
でした」モチモチ

指「よしよし、ちつと他にも回してやれな。んでやっぱ麺啜れねえ
のな」

ジャン・ボール「俺らは何でお前らがわざわざ麺啜んのかかわかん
ねえけどな」

三笠「こればかりは文化や慣れだろうな、我々も上手くフオークな
どを扱える訳ではない」

ジャン「ああそれは俺も無理、よく怒られる」

レナウン「貴女もレナウンと一緒にマナーを学びますか？」

ジャン「遠慮しとく、蕁麻疹出ちまうわ」

指「あー、お前らちつと時間くれ、いいか？」

「「「「？」」」」

指「皆、この暑いなか毎日職務に励んでくれてありがとう。今日のこれは、その…ささやかな罪滅ぼしって感じた。

俺らは軍属、辛かろうとへばろうと世界を守る為に毎日仕事しなきゃなんねえ。

お前らにはいつも無理させちまう。なんで、少しはこんなものでも涼しく夏を楽しめたらいいかなって思ったんだ。」

レパルス「私達は大丈夫だよ！いつもこうして皆のこと考えてくれる、これだけで明日も頑張れるから！」モチモチ

レナウン「せめて…せめて食べ終えてから…」

指「ありがとう、喉詰まらせんなよ？」

…そうは言ってくれても今年は暑すぎるし、皆ももう限界なのはおわかってる。そこでだ、最低限の哨戒等以外、当基地の職務をこれより1ヶ月休止する！」

「…!!?」

指「つまり…こつから夏休みだお前らあああああああああああ
!!!」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ロング「やった！これでイカが出来る！」

綾波「塗りは任せるのです…！」

撫順「ウデマエ上げなら手伝うよー」

Z23「夜遅くまでは駄目ですよ!」

山城「ありがとう殿様あ！殿様もお休みなら遊んで下さいよう」

扶桑「あらあら、あまり振り回しては駄目よ？」

寧海「明日もお休みだっと思つたら一層ご飯が美味しい…!!」

平海「ピリツとしてコクのある…それでいて爽やかな東煌風…合う…」

指「よつしや、景気付けだあ！酒も解禁じゃ樽で持つてこいやア!!」

PoW「貴方弱いじゃない」

テイルピッツ「レーベンブロイしかないけどこれでいい?」ドンツ

フツド「スコツチなら…ジヨニーウォーカーのブルーが少し…召し上がりますか?」

サンデイエゴ「よくわかんないけどハーパー？ってのがあったよ！あげるね！」

三笠「私からも君をねぎらいたいんだ、受けてくれ。取って置きの浦霞だ」

逸仙「私からも：白酒を仕込んでおりまして…」

指「酒税法って知ってる？」

POW「：潰れても部屋までは運んであげるわよ」

指「：助かる、多分世話になるな悲しいけど」

POW「ところで私からも重桜のお酌？してあげたいから飲みなさい」

指「よかったあ、明日休みにしといて」

——翌朝——

指「ツてえ：やべえ、仕事お…」

赤城「指揮官様がお休みとおっしゃいましたのよ？」

指「あつ、そっかあ：んで何でいんの」

赤城「赤城はいつもお側におりますわあ：。それにつ：指揮官様、寝てしまわれて昨日赤城の杯を受けてくださらなかった…」グズツ

指「完全に潰れたからなあ、悪いけど記憶が無えや」

赤城「そんなあ…」

指「そうだと水飲みたいわ。赤城、徳利に入れて持ってきて貰えるか？」

赤城「：！はい、かしこまりましたわあ」パタパタ

指「：…」

加賀「感謝する、でも次は姉様の番まで潰れないことだ」

指「次は肝に『命』じるよ：：なんとか持たせろってな」

指「：基地の夏期休暇を決定してから3日か」

P o W 「貴方執務室なんかで何してるの？」

指「見てわかるだろ、仕事だ。休みとはいえ俺達は国防組織、すべきことが無くなるなんてこたあ無え。」

P o W 「大変ね、貴方も。そうまでして私達に休みをくれてありがとう」

指「別に大変なんてことも無えし無理もしてねえからお前らはゆっくり休むことだけ考えな。：それにな」

P o W 「？」

指「いざ休みつつたつて何していいか俺が分かってねえんだよ：来月やりやいいこの処理を今やるレベルなんだよ…」

P o W 「完全にワーカーホリックじゃないの、可哀想に。やっぱり貴方も重桜人のご多分に漏れないのね」

指「血筋はそうだが生まれは違う。だから単に俺がつまらねえ人間ってだけさ」

P o W 「あら、私は貴方を見ていて飽きないわよ？つまらないなんてことはないわ、貴方はただ『自由の使い方』を忘れてしまっただけよ」

指「ありがとよ。ところでお前は何かしたいことでもあるのか？」

P o W 「別に無いわね。海水浴も今日はその気分ではないし。そうね、貴方と緩やかに過ごしたいのだけれど、構わないかしら？貴方は好きなことをしていて良いから」

指「つくづく物好きなこつたなあ：俺昼時までボケーっとしとくから好きにしな。その後良ければ昼飯作るけど」

P o W 「決まりね！今日もお昼が楽しみ」

指「てめえハナっからそれが狙いだったら」

指「…」

P o W 「ねえ貴方、何聴いてるの?」

指「およそ王家のお方々が聴きそうに無えもん」

P o W 「いじわる。ちよつとぐらい教えてくれたっていいじゃないの」

指「メタルコア」

P o W 「何それ、ちよつとイヤホン片耳貸して」

指「ほれ」

P o W 「ありが——うわっ?!?!」

イヤホン『I want to take the time to stop and think!!! about doing this, and what it might mean to be!!!』ドガガガガ

指「そうなるよなあやっぱ」

P o W 「何これ…」

指「The Ghost Insideって名前のユニオンのバンド。俺はこういうの好きだな」

P o W 「私にはわからないわ：クラシックだとかミュージカルとかは聴かないの?」

指「聴かないね。ポップスもあんま得意じゃない」

P o W 「そう：なら私もそのメタルコア?に慣れるようにしてみようかしら」

指「やめとけ、自発的に好きなもん聴くのが一番だ。無理に合わせなくてもいいだろ」

P o W 「貴方と共有出来るものを少しでも増やしたいの、駄目?」

指「：そんな可愛いこと簡単に言いやがって…」

P o W 「なあに?」

指「何でもねえよ、初めてでも聴きやすいやつ後で揃えとく。とりあえず昼が近いから食べたいものあれば言ってくれ」

P o W 「ありがとう、お昼は私。 pasta 食べたい」

指「種類は?」

P o W 「お任せするわ」

指「了解。じゃ、一丁やるかあ！」

指「はい、というわけで今日作るのはボンゴレ・ビアンコだな」

P O W 「ねえ私に着せたこれは何？」

指「割烹着」

P O W 「意図は？」

指「何となく」

P O W 「つまり貴方の趣味ね…」

指「細かいことはいいいんだよ。はいまずは下拵え、エビの頭外して殻剥いて背ワタ取るぞ」

P O W 「背ワタ取るの思ったより面倒なのだけれど」

指「楊枝を背中に刺して引き抜くか尻尾の真ん中捻って引き抜け」

P O W 「これは慣れね…きやあ!？」ビチビチ

指「おーおーまだ跳ねるやついたのか」

P O W 「ちよつと何とかしてよお！」

指「ビビんな、エビつてのは頭外してもしばらく動くんだ。処理は終わってるんだしそこ置いときな。次は貝の砂抜きだ」

P O W 「時間かかりそうね…」

指「だから砂を吐きやすいハマグリを使う。んで、バットに敷き詰めたら50度のお湯に10分浸ける」

P O W 「そんな短時間でいいの？」

指「これだと貝が早く砂を吐くんでこんなもんで済む。勿論前日から一晩かけて砂抜きしてもいい、アサリなんかも同じ要領でいける」

P O W 「じゃその間にニンニクをみじん切りね」

指「鷹の爪は辛いのが苦手なら種抜いとくといいぞ」

P O W 「そう、私辛いのが好きだからいいけど」

指「おし、一通り出来たな。それなら砂抜き終わったハマグリを4つ残して後は全部殻から外す」

P O W 「見栄えも大事だけど食べながら外すのは手間なものね」

指「見栄え気にならないなら全部外していい。外し終わったらフライパンにオリーブ油…ここではピュアオリーブ油を多めに引いて、ニ

ニンクを入れて弱火だ。焦がしちやいけねえ」

P o W 「パスタも今茹で始めるわね。いい香りじゃない」キュルル
指「香りがしてきたら鷹の爪とハマグリとエビを入れて中火、その後少ししてから塩とお好みで胡椒、そして白ワインを入れる。アルコール飛んだらここでパスタの茹で汁入れてよく混ぜてから蓋して蒸す」

P o W 「調理工程でここまでお腹空くものって無いんじゃない？」
ギョルルル

指「ウェールズの腹の虫が6速にギア入れたところでパスタ茹で上がったな。表示時間より一分半早く上げてフライパンに移し、ソースの塩加減見つとろみが付くまで混ぜる。濃さととろみは茹で汁で調整してくれ」

P o W 「最後に盛り付けてパセリ散らして…完成ね！早速頂きましょう！」

指「ただけ飢えてたんですかね…」

P o W 「食材から出たエキスと絶妙な塩加減、そしてニンクと鷹の爪の香り…たまらないわ、絶品よ」

指「そいつはどうも。…うん、アルデンテのタイミングも外してねえ、上々だ」

P o W 「やつぱり貴方と一緒にいると楽しいわ、貴方はずまらない人なんかじゃないわよ」

指「ありがとう。…本音は？」

P o W 「やること無いなら私にまた料理作ってくればいいじゃない」

指「んな事だろうと思ったよ…。まあいいさ、お前が喜んでくれるなら張り合いもある」

P o W 「あら嬉しい。じゃあ決まりね。…でもね、勿論貴方と一緒にいられて楽しいのも本当よ。つまらないなんて感じたことはない。美味しい料理だけじゃない、日常の些細な事も、貴方のことなら楽しいの」

指「…よせつての、油まみれの口で口説かれても腹が減るだけだ。

まあ、ありがとうよ」

P O W 「ほんつと素直じゃないのね」

綾波 「何か一言どうぞ…です」

赤城 「ムキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
!!!!」

アズレン料理部 第四章：空腹レ○プ！お手軽軽食と化したお握り

高雄「指揮官殿、ただいま戻った」

指「おーお帰り、全員ちゃんと揃ってんな？」

高雄「ああ、第二艦隊全員無事だ。ちゃんと連れ帰って来たぞ。作戦も成功だ」

指「最高だ、よくやった。：しかしお前この頃被弾多いな？今日もやたら煤けてるし大丈夫かよ？」

高雄「ああ、問題ない。：すまぬ指揮官殿、拙者もまだまだ修練が足らぬと見える」

指「んなハズ無えんだが：もしかして装備何か合わなかったりとかあるか？それかどこか具合悪いか？だったら無理しないで今すぐ寝て——」

高雄「…ふっ」

指「何よ」

高雄「いや、指揮官殿の狼狽ぶりが嬉しくてな」

指「面白いんじゃないか」

高雄「そう。：狼狽するほどそなたが拙者を案じてくれる、これほど嬉しいことは無い。だからこそ、拙者はまたこの刀を振るうことが出来る」

指「そこまで言ってくれるたあ光栄だ、みつともねえ姿晒した価値は十分あったな」

高雄「相変わらず素直ではないな。：うむ、この際だ。

拙者も：少し：恥ずかしい話なのだが：構わぬか？」

指「お、いいぞ」

高雄「その：だな、拙者の被弾増加についてだが：思い当たることと言うか：単なる言い訳でしかないがひとつだけあると言うか：」

指「何よ？」

高雄「あの：実は：拙者の未熟さゆえ：その：さ、作戦中にお腹が

減って集中出来ぬのだ…ッ!!!」

指「ブッフオごめん待っヒヒヒヒ」

高雄「何故笑う!? 拙者恥を忍んで打ち明けたと言うに…」

指「やー悪いね、思った以上に理由可愛いもんで安心したんだわ」

高雄「可愛っ…!? せ、拙者も女子であるのだぞ!…こら笑うでない!」

指「悪かったって。でも軽い理由で安心だ、俺がなんとか出来るからな」

高雄「あ、指揮官殿のお手を煩わせる気は」

指「大丈夫、こいつは俺の得意分野だ。それにお前らが全力出すために俺がいる、当然だろ?」

高雄「指揮官殿…かたじけない、ご厚意、甘えてもよいか?」

指「もーっと頼ってくれてもいいのよ?」

高雄「割といつもそなたに頼りきりな気もするがな、拙者らは」

指「まあ俺は前線出られねえからどっこいでしょ。早速明日も第二艦隊は出撃だ、悪いが頼めるか?」

高雄「お任せあれ、指揮官殿」

指「ありがとよ。明日からは被弾少なくなるぞ、楽しみにしとけ?」

高雄「本当に期待しているよ」ギョルルル

指「今は我慢しろ夕飯あつから」

指「さて日を改めて朝だが」

P O W 「何よお…こんな朝早くに…」

指「嗅ぎ付けたか」

P O W 「炊きたてのライスの匂いさせてる方が悪いんじゃないの…」

指「まあここ自分用キッチンだしな。…ナチュラルに俺の部屋に居るなお前な」

P O W 「いーじゃないの…何作るの…?」

指「ああ、出撃部隊に場合によっては簡単な弁当付けてやろうと思っってな」

P O W 「いいなあ私にも頂戴よ」

指「お前の出撃のときにな」

P o W「けち」

指「いい加減目覚ましやがれ子供みたいにぬいぐるみ引きずって来ちやつてまあ」

P o W「いーじゃないの…可愛いでしょ…ダイオウグソクムシ」

指「ごめんわからん」

P o W「可愛いのに…出来たら起こして…」

指「起きろってんだよ…まあいい、アシスタントいねえけどやるかあ」

指「まずゴボウをさががき、ニンジンを薄く銀杏に切ってゴボウは水に浸ける。小ネギも切つとこ」

指「次に鶏肉、どこ使ってもいいが胸が安くていい。一口よりかなり小さめ、二センチ四方よりちよい大きめぐらいに切る。あ、カオリー気にしないなら皮は捨てないで後で使う」

指「さてここでフライパンを熱し、鶏の皮をじっくり焼いて脂を出し、フライパンに塗る。皮は途中で表面カリカリになるんでそこで一度上げる」

指「そこに少し胡麻油、ニンニク、生姜を足してから肉入れて少しだけ塩振って炒める。色が変わったらそこにゴボウ、ニンジンを入れ、さらにさつきの鶏皮を肉と同じサイズか小さめに適量カットして入れて炒める」

指「んで少し炒めたら顆粒だし…俺はあごだし好きなんでそれ使うけどほんだしが安くていい、それを入れる。そしてそこに醤油とみりんを5：4で入れて煮る。ちなみに分量は好みがあるが、汁気で具がひたひたになるまで入れるんで割と多いぞ」

指「あとは砂糖とか味の素で整えつつ煮る。塩は醤油がかなり入る分意外といらなかつたりもする」

指「出汁が好きなら出汁を多めにすればいいし醤油の甘辛さを増したいなら醤油とみりん増やせばいい、好みだなこれは」

P o W「くっ…何て香り…お腹空くじゃないの…」

指「おはようウエールズあとちよいだ」

P O W「そう、おやすみ」

指「だからあとちよいなんだって。炊いといたお米にフライパンの中身汁ごと入れて、ネギと胡麻入れてよく混ぜて…おら出来たぞ」

P O W「おはよう指揮官、最高の朝ね」

指「急に元気だなお前」

P O W「さ、早速頂きましょう?」

指「だーからこれ第二の弁当つたろうが…俺らの分もあるけど」

P O W「流石ね指揮官、頂きます!」

…うん、鶏の旨味と調味料や出汁のしつかりとした、それでいて優しい味がまんべんなくご飯と合わさってる。それにゴボウとニンジンも食感・風味共にベストマッチね。鶏肉も小さいからご飯とよく混ぜて食べやすいし風味もよく伝わる」

指「寝起きの食レポじゃねえなこれ。しかし我ながら上手く出来たな」

P O W「貴方の作ってくれろご飯で1日を過ごせるなんて最高の贅沢ね」

指「嬉しいけどそれ昼と夜も俺が作ることになってませんかね…」

P O W「出来ればそうして欲しいのだけれど」

指「暇な時にな。とりあえず残りをおにぎりにして3つずつ箱に詰めていく。ついでに沢庵詰めとこ」

P O W「今日の第二艦隊、良い戦果を期待出来そうね」

指「だといいな」

高雄「では指揮官殿、行って参る!」

指「おう、第二艦隊忘れ物無いな? 弁当持ったな?」

「「「はー!」」」

指「おっしや、頼んだぞ!!」

高雄「さて…そろそろ休憩にしよう。お腹も空いたし」

愛宕「指揮官君お手製のお弁当…あらあ…!」

高雄「炊き込みご飯のお握りか…！沢庵まで付いてる！」
愛宕「お姉さん嬉しいわ…でも胃袋掴むにはこれを越えなきゃいけないのね…」

高雄「壁は高いな…しかしこの少し濃い味がまた体に染み渡る…!!」

伊58「お楽しみのところ失礼」

高雄「食べ終わった、問題ない。敵か」

伊58「そ。空母部隊、45度方面からよ」

高雄「わかった、かたじけない。

…今日からの拙者は、第二艦隊は、今までのように甘くは無いぞッ！指揮官殿、これよりそなたに最高の戦果を持ち帰ろう！」

愛宕「相手も運のない子ね、私達の太刀筋、今日はかなり重いわよ…?」

高雄「ああ…力が湧いてくる様だ！

行くぞ！作戦再開だッ!!!」

「」「応ッ!!」「」